

**平成 30 年度研究拠点形成事業
(A. 先端拠点形成型) 実施報告書**

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	名古屋大学
(アメリカ)側拠点機関：	コロンビア大学
(フランス)側拠点機関：	コレージュ・ド・フランス
(ドイツ)側拠点機関：	ベルリン自由大学

2. 研究交流課題名

(和文)：テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築

(交流分野：人文学)

(英文)：Academic Consortium for Creating the Value of Religious Cultural Heritage through Text Studies.

研究交流課題に係るウェブサイト：<https://www.lit.nagoya-u.ac.jp/cht/>

3. 採択期間

平成 29 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：名古屋大学

実施組織代表者(所属部局・職名・氏名)：総長・松尾清一

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：人文学研究科・教授・阿部泰郎

協力機関：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館

・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター、東京大学、南山大学、
慶應義塾大学、金沢大学、龍谷大学

事務組織：名古屋大学研究協力部研究支援課・文系事務部

相手国側実施組織(拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：アメリカ

拠点機関：(英文) Columbia University

(和文) コロンビア大学

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Faculty of East Asia, professor, Haruo SHIRANE

協力機関：(英文) Harvard University

(和文) ハーバード大学 イエンタン研究所

経費負担区分：(A型)：パターン1

(2) 国名：フランス

拠点機関：(英文) College de France

(和文) コレージュ・ド・フランス

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, Jean Noel ROBERT

協力機関：(英文) Paris Diderot University, Strasbourg University, EFEO, INALCO

(和文) パリ第七大学、ストラスブール大学、極東学院、東洋言語文化学院

経費負担区分：(A型)：パターン1

(3) 国名：ドイツ

拠点機関：(英文) Free University of Berlin

(和文) ベルリン自由大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of History, Professor, Jochem KAHL

協力機関：協力機関：(英文) University of Heidelberg, University of Hamburg, Austrian Academy of Science, Strasbourg University

(和文) ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、オーストリア・アカデミー、ストラスブール大学／イナルコ

経費負担区分 (A型)：パターン1

5. 研究交流目標

5-1 全期間を通じた研究交流目標

○人類が創出した文化の所産は、その普遍的価値を等しく認められ、尊重されるべき共通の遺産だが、その頂きに立つ宗教の生み出し、その象徴となる遺産は、過去にも、とりわけ現在の世界の状況において、深刻な危機に瀕している。多様性を認め、異質な文化と共生することを理想とする社会にあって、人文学が果たすべき責務のひとつに、人類の宗教文化の遺産についての普遍的な意義を、その情報を含め、諸研究機関の連携による分野間の学知の総合によって見出し、提言する学術創成が求められる。そのための総合的な研究の蓄積と理念において領導する欧米の中核拠点大学との、国際共同研究が必要とされている。○世界各国の文化機関(博物館・美術館・大学・図書館等の)所蔵分を含めて、各地に伝えられる宗教が生み出した文化遺産に対する総合的なテキスト学による探査と研究を推進する先端的国際研究拠点を、名古屋大学文学研究科の「人類文化遺産テキスト学研究センター」(CHT)に構築する。このCHTでは、日本／アジアの宗教文化遺産のアーカイブス化と探査で挙げた大きな成果を、まずコロンビア大学、コレージュ・ド・フランス、ベルリン自由大学との

成果の共有を通じて連携し、中堅・若手研究者の相互交流による広域な大学間および文化機関間の研究集会や国際ワークショップ開催による“宗教テキスト文化遺産”研究コンソーシアムの活動を立ち上げる。○この国際学術連携を通じて、5年間で、日本を中心に（アジア／ヨーロッパ／中東等を包摂した）世界的な宗教テキスト文化遺産の普遍的価値の認識を共有し、そのアーカイブス化を通じた情報共有と、人文学における宗教テキスト研究が有する画期的な学術上の発展可能性を、最先端の国際共同研究によって提起する。

5-2 平成30年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

名大 CHT をハブとする、米仏独三箇国の傑出した人文学拠点大学・研究機関との共同研究を通しての拠点構築のための体制・枠組を明確に立ち上げることが、今年度の重要な課題である。米国コロンビア大とは共同研究の成果発信（英文論文集の編集・刊行）という目標に関する明確な ロードマップ 日程表と責任態勢を確立する。仏コレージュ・ド・フランスの場合も同様であるが、更に加えて両機関との学術交流協定締結を実現させる。独ベルリン自由大とは、共同研究プロジェクトの立ち上げを次年度にかけて行う。また既に共同研究において先行する米ハーバード大学、仏ストラスブール大学、独ハイデルベルク大／ハンブルク大学等のそれぞれ特色ある研究拠点との交流やセミナー等の成果を拠点との共同研究と有機的に結び付けることが求められる。

更には、国内の研究機関との連携も必須である。前年度内に行った金沢大学、龍谷大学との連携協定の締結、人間文化研究機構の諸機関（日文研・国文研・歴博など）との研究資源などの特色を生かした連携など、名大 CHT がこれら研究協力機関との双方向かつ内外の研究交流協力体制の要となることを最大の目標とする。

<学術的観点>

当初の計画における、アメリカ／フランス／ドイツ三カ国の人文学におけるテキスト学／文化遺産／宗教学という学術上の理論・方法上の特色と卓越する分野の成果を生かすべく、各国の共同研究の主題（課題）と対象／方法論について特に配慮し、日本側及び名大 CHT の研究資源および学術上の利点を最大限に生かした共同研究の達成について見込まれる成果への貢献及び活用ができるように設定する。

宗教文化遺産について、人類学的な文化理論の パラダイム 枠組を提案すると共に、社会実践上の価値・意義を創成することを必須とするアメリカ人文学との宗教文化遺産をめぐる共同研究を、「境界の文化論」と像内納入品の宗教文化遺産化としての比較研究の二方向から進め、それぞれの課題における着実な成果を期間内に作成・提出し、その過程における研究連携の実績を人類文化遺産研究の発展的学術成果とする。

理論（テキスト論）研究と思想／文学的水準の研究において卓越するフランス人文学とは、とくに東洋（中国・極東）における重厚な蓄積を誇る学術上の特色を活かした新たな宗教テキスト学の構築が期待される。具体的には、論議と宗論という、仏教のみならず宗教一般において普遍性を有する研究対象を通じて、従来の学知を統合しつつ新たな宗教テキストに

立脚した文化遺産の理念を提示する。

文化的記憶の提唱、およびアーカイヴス学とその実践、歴史的蓄積において卓越するドイツ人文学において、その最もすぐれた達成を見せる分野であるギリシア・エジプト考古学^(アルケオロジー)をはじめとして、物質（モノ・マテリアル）とそこに付随する文化性との間の連関を、人類共通の普遍的文化遺産として見出す高次元の文化理論研究へと展開させる。

<若手研究者育成>

拠点形成期間中に毎年度一回恒例で確実かつ最優先にて行う予定の南山大学宗教文化研究所における「日本宗教文化セミナー」が、欧米の有力大学からの大学院留学生ないし若手研究者の研究成果発表・研究交流をへて研究水準の向上に資する重要な機会を提供する。

これ以外にも、本年度に企画されるセミナーの多くには、日本／海外の若手研究者や大学院生が参加し、研究上の実績を上げると共に、各自の博士論文執筆をサポートするための院生によるワークショップを中心とし、又はセミナーの一部に組み込むように配慮する。

加えて、平成 29 年度からスタートした「頭脳循環」プログラムは、その研究教育の対象課題と参加者がグローバル展開プログラムに重なるところだが、欧州の仏・独（ストラスブール、ハイデルベルク）の拠点校を中心に、若手研究者（PD）を派遣し、研究・教育に従事させることを任務としており、本拠点形成と適切に連携すれば、若手育成にとって大きな相乗効果が期待できるだろう。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本拠点形成が主催もしくは共催する国内のセミナー（研究集会・シンポジウム・講演会）は原則的に一般公開されるものであり、また、その一部（コレージュド・フランスでの公開会議など）については、ウェブ上で講演内容を広く発信する工夫を行っている。

また、本拠点形成事業の基盤となる代表者による科研基盤（S）は、最終年度にあたる平成 30 年度に人間文化研究機構の各機関と名大 CHT をハブとして協定を締結し、神奈川県立の歴史博物館および金沢文庫・国学院大学神道博物館と連携した総合テーマ「列島の祈りー日本儀礼テキストの世界」を横断的な主題対象とする展覧会を催行する予定であり、これら主機関の展覧会は、本学術拠点形成事業の共同研究や各種セミナー、ワークショップ等と相互に有機的に連携し活用され、また研究成果の社会発信ともなる。このほか、特にハーバード大学との像内納入品宗教テキストを廻る国際ワークショップでは、東北大学ほかの文化遺産関係諸機関との連携により、国際的スケール（東アジアの中国・韓国・日本）での各国の像内納入品を対象とした宗教文化遺産の研究が国際比較のスケールに世界的に拡大して展開する大きな契機となると思われ、従来の日本の美術史・彫刻史を中心とする像内納入品の調査研究の蓄積と成果が、全く新しい次元で進展する、人文学上でも画期的な機会となることが予期される。

特に共同研究の出発点となった、ハーバード美術館所蔵の聖徳太子二歳像の胎内納入宗教テキストの調査研究（CHT により平成 26 年度から継続して行われている）は、本年度の交流活動を元に、平成 31 年度にはハーバード美術館で展覧会を催す予定であり、本拠点形成事業がこれに学術上の多大な貢献をなすことが期待されていることを特記しておきたい。

6. 平成30年度研究交流成果

＜研究協力体制の構築＞

拠点形成の開始から二年を経て、名古屋大学 CHT は各国の拠点とそれぞれの協力機関との、共同研究の進展と数多くのセミナー開催による多角的な連携により、有機的な協働が生まれつつある。

・アメリカ、コロンビア大学との共同研究(R-1)は順調に進捗し、本年度末にはニューヨークで共同研究成果の報告と討議を兼ねた国際研究集会「境界・芸能・神仏」(S-8)を開催した。連携する多数の研究参加者が結集し、その成果は国内協力機関である南山大学宗教文化研究所の協力を得て公刊を期している。この過程で、米側協力機関との共同研究(ハーバード大 R-3)やセミナー(ハーバード大、S-3・CA サンタバーバラ、S-1)などがゆるやかな連携の元に企画・実施され、参加研究者と研究課題相互の交流と今後への展開の端緒となった。

・フランス、コレージュ・ド・フランスとの共同研究(R-2)では、初年度にパリで開催した国際研究集会の成果をより充実・展開させるため、国内協力機関である龍谷大学と共同して国際シンポジウム「日本仏教と論義」(S-2)を開催し、その成果は次年度に同大世界仏教文化研究センターにより日本語版論文集として公刊し仏語版の基礎とする予定である。この他仏協力機関ではストラスブール大学(S-5)、エクス・マルセイユ大学(S-6)のセミナーに参加して今後の連携拡大の礎を築き、更にスイス・ヌーシャテル大学に招聘された学会と名大へ訪問して開催された学会もセミナーに位置付け(S-9,10)、今後より重要な拠点と緊密な学術上の位置に立つジュネーブ大学との協力関係構築に備えることができた。

・ドイツ、ベルリン自由大学とは、今年度は拠点研究者の要請により韓国ソウル大学と中央研究院で催された韓国歴史文化遺産アーカイヴス・ワークショップに参加し、ドイツ拠点による大型学術プロジェクト SFB980 の遂行に協力して、本拠点形成の目的である宗教文化遺産創成のための研究機関間のネットワーク構築の為の足場を韓国の主要研究機関とその研究者との間に築いた。これは安東・国学振興院との提携と学術交流の契機となり、次年度の国際学会をセミナーと位置付けて参加することを予定している。なお、本年度末には弘前大学と名古屋大学とが本拠点形成の対象主題となる宗教文化遺産を中心とした学術交流協定を締結し、国内の拠点化を一層推進して国際的な拠点形成の為の基盤を強化した。

＜学術的観点＞

・日本と世界の宗教文化遺産について、共同研究の対象とした多様な位相と地域および歴史の状況や変化を踏まえつつ、その価値や意義の発見をテキスト学の実践的応用・展開により試みることが、本拠点形成の学術的使命である。その過程で、「宗教文化遺産」という概念も絶えず問い直される。その理念は絶対普遍でなく、常に歴史のかつ文化的な文脈の許で形成される構築物であることが、特にストラスブール大学のセミナー(S-5)において提起された。国家や民族および地域の自意識形成は、殊に近現代史にあって不可欠な文化遺産認識の要因であるが、宗教に関しても古代以来、より永い時代的変遷の下で同様な自己意識にもとづく認識の再構築がなされることが確認されるのである。加えて、コロンビア大学との「境界」を共通課題とする共同研究(R-1)が提起する、宗教文化遺産の領域が尖鋭に照らし出す

文化の諸現象は、^{コスモロジー}世界観や時空の観念、性や身分など社会的な関係性、とりわけ宗教や民俗そして芸能がうかびあがらせる聖俗や浄穢の差別による境界(障壁・結界)と、それに抗い、無化し、乗り越えようとする越境の文化的運動として認識される。日本における豊かな宗教文化の遺産を、そうした視点から捉え直した共同研究の進展からは、それらの普遍的価値と意義を巡る再認識として大きな探求の可能性と展望が拓けた。また、コレージュ・ド・フランスと行われる論義の多面的な研究についても、単なる文献学的研究に留まらず、宗教的論争の多様な位相をテキストの視点から位置付けることを通じて、むしろ宗教文献とその成立基盤にある宗教儀礼の歴史的背景や、宗派・教団等の組織化と国家との関係性、また、正統と異端の論争・差別から生ずる正統性や真正性が遺産化と如何に結び付くかなどの諸課題が改めて発見されることにより、宗教文化遺産の文化学ないしテキスト学としての大きな学術領域が立ち上がることが予想される。

<若手研究者育成>

本拠点形成の大きな特色である、南山大学との共催による「日本宗教文化セミナー」(S-7)は、本年度も開催され、アメリカ、イギリス、ドイツ等から博士論文作成中の大学院生5名が公募により選ばれて参加し、充実した研究報告とコメンテーターによる討議が行われ、それぞれの論文完成の為に大いに貢献した。これ以外のセミナーでも、コロンビア大学との国際研究集会(S-8)では特に若手研究者と院生のセッションを設けて全体の主題の深化に貢献する意欲的な研究報告が行われ、ハーバード大学とのワークショップ(S-3)では、同大と名大の院生による自由な報告と討議を、各分野の一線研究者を招いて公開で行った。更に金沢文庫におけるワークショップでは、協力機関ブリティッシュ・コロンビア大学が多数の欧米諸大学の院生を引率して参加し、最先端の研究成果と貴重な文化遺産の観覧の共有を実現するなど、若手研究者・院生に多大な研究進展の機会を提供した。全体としてそれらの波及成果は目覚ましいものがあった。なお、これら若手研究者全体の中で女性の割合は7割を超えており、女性の学術参画の点でも注目すべき効果をあげている。

<その他(社会貢献や独自の目的等)>

本拠点形成事業と密接に関連する、その学術基盤を成す科研基盤(S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究」は、平成30年度を最終年度とするが、その総括的な成果報告を兼ねた社会還元として、名大CHTの主催により、人間文化研究機構の各機関と共同企画した連携展覧会「列島の祈り」を、四館で特別展として連続開催した(国文学研究資料館「祈りと救いの中世」2018年10月15日～12月15日、神奈川県立歴史博物館「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」同10月27日～12月9日、同金沢文庫「顕われた神々」同11月16日～2019年1月14日、國學院大學神道博物館「舞楽」2018年9月12日～11月15日、「大嘗祭」2018年12月2日～2019年1月15日)。この企画実行に、拠点形成事業参加研究者と国内協力機関の多くが参加し、展示構成や解説図録等の執筆、講演、セミナー講師、シンポジウム参加など多面的に関与し、宗教文化遺産をめぐるテキスト学的研究の成果を提示し、発信につとめた。これらの展覧会とその図録は、各国の拠点・協力機関とその研究者にも周知・配布され、観覧した拠点コーディネーターや参加者も多く、反響も大きかった。コロンビア大学とのセミナー(S-8)は、これらの連携展示の成果を踏まえて大きく利用している。また、コーディネーターが研究代表者となるJSPSグローバル展開プログラム「絵ものがたりメ

ディア文化遺産の普遍的価値創成国際共同研究による探求と発信」も三年目を迎え研究成果をまとめて発信する段階にあるが、その一端としてコロンビア大学の共同研究と連動し、ワシントンのフリーア美術館で日本の文化遺産である絵巻を中心とした宗教文芸に関わるワークショップ兼研究会を行った。ここに拠点研究参加者の多くが参加し、拠点形成共同研究の一環として、その多角的かつ複合的な研究活動を推進している。以上のような領域融合の国際学術活動と組み合わせることによって、本事業の内容を相乗効果的に充実させ、日本の人文学術研究の最先端を提示することにより、相手方拠点を始めとする対外的なプレゼンスを高めていくことが適切に実践された。

＜今後の課題・問題点＞

現状では、日本側と相手側を問わず、各拠点のコーディネーターに研究や学術交流上の任務が集中し、多忙を極めかつ高齢者には負担が過重で健康上も無視できない状態となることを改善する必要がある（日本側は次年度よりコーディネーターが高等研究院客員教授となり環境を一部改善する）。また、日本側の名大CHTおよび国内協力機関との積極的な連携により、各共同研究は活発化し、セミナーの企画も飛躍的に増加したが、目標とする拠点間相互の共同研究やセミナー参加、合同開催は未だ行われておらず、最終年次までには各拠点が名大において一同に会する「国際宗教文化遺産フォーラム」実現の見通しを立てる必要がある。そこで、次年度には、第三国でのセミナーをその契機とすることを考え、エストニア、タリン大学とイタリア、ヴェネツィア大学でのセミナーに、各拠点のメンバーの参加を要請し、複数の参加を実現することを目標とする。これ以外にも、相互に共通する課題と対象を提案し、最終的に〈国際宗教文化遺産テキスト学〉研究共同体の構築に一步を踏み出す、具体的なロードマップを作成したい。

7. 平成30年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成31年度
共同研究課題名	(和文) 境界と越境のテキスト文化遺産 (英文) Texts as Cultural Heritage: Establishing and Crossing Boundaries				
日本側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	(英文) Haruo SHIRANE, Columbia University, Faculty of East Asia, professor, professor 2-1				
30年度の 研究交流活動	初年度(2017年)より継続的にコロンビア大学のメンバーと日本および米国でセミナーとフィールドワークを含めて行ってきた「境界」を巡る文化遺産研究は、研究機関の研究者を中心に広汎な分野の専門研究者による参加者を呼び、前近代日本における芸能と宗教を主たる対象とした研究集会を準備し、2019年3月にはコロンビア大学で国際研究集会「境界・芸能・神仏」(S-8)を開催。二日間で延べ百名を超える参加者により、報告と討議が行われた。				
30年度の 研究交流活動 から得られた 成果	次年度以降(2020年)に共同編集により刊行される予定の英文論集の基礎稿が全報告者により提出され、日英双方の翻訳を付して、報告書(381頁)にまとめられ、参加者全員に配布された。本学会での報告成果と討議による更なる問題提起を受けて、「境界」と「越境」の文化遺産のテキスト学による再認識と評価のための共同の取り組みが更に進展し、他の共同研究や、次年度に予定される第三国におけるセミナーに共有される課題となるであろう。				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
共同研究課題名	<p>(和文) 宗教文化遺産としての論義と宗論テキスト</p> <p>(英文) Texts on Monastic Debates and Disputations as Religious Cultural</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	<p>(和文) 阿部泰郎、名古屋大学人文学研究科、教授</p> <p>(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	<p>(英文) Jean Noel ROBERT, College de France, Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, 3-1</p>				
30年度の 研究交流活動	<p>初年度に開催されたコレージュ・ド・フランスにおける「論義」学会の成果を更に展開・充実させるべく 2018 年 5 月に開催された、協力機関・龍谷大学との共催による国際研究集会(S-2)は、百名を超える参加者と若手研究者の研究報告を含み、日本仏教における論義の意義と役割を国内学界に再認識させる重要な契機となった。</p> <p>また、2018 年 12 月には、東京の日仏会館で仏側拠点代表のロベール教授主催になる中世説話の東西比較の講演会が催され、これに名古屋大学の拠点代表も招かれて講演し、本共同研究の幅をより展げることができた。</p>				
30年度の 研究交流活動 から得られた 成果	<p>本年度はこれらの学会における報告と討議を元に、龍谷大学世界仏教文化研究センターで編集する日本語論集の原稿執筆を中心に、次年度以降に本格化する論義テキスト資料と儀礼の文化遺産化のための準備と研究者ネットワークの構築をはかった。その結果、本共同研究の目的である仏語版『法宝義林』「論義篇」の輪郭が可視化され、学術的基礎を築くことが可能となった。</p>				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 30 年度	研究終了年度	平成 33 年度
共同研究課題名	<p>(和文)「像内納入宗教文化遺産の比較研究」</p> <p>(英文) Comparative Research on the Objects Inserted within Religious Statues</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	<p>(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 近本謙介・名古屋大学人文学研究科・准教授</p> <p>(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1 CHIKAMOTO Kensuke, Nagoya University, Graduate School of humanities, Associate Professor 1-5</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	<p>(英文) James Robson, Harvard University, Professor 2-7 ABE Ryuichi, Harvard University, Professor 2-5</p>				
30年度の 研究交流活動	<p>2018年6月に神奈川県立金沢文庫で行われた国際共同ワークショップ(S-3)において、ハーバード大学のロブソン教授の許に韓国の「仏像腹蔵品」研究者2名および、フランスの拠点研究者1名が参加。また米国の協力機関カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学のラフィン教授等のグループも参加し、日本側では金沢文庫と協力機関東北大学等の2名の参加により、東アジア全体に渉る像内納入宗教テキスト及び宗教的身体観(五臓曼荼羅・五臓神等)の接続という思想史上の課題が浮上し、そのために宗教学研究との一層の連携が求められることになった。</p>				
30年度の 研究交流活動 から得られた 成果	<p>次年度の5月には、これまでに積み上げてきたハーバード美術館蔵聖徳太子二歳像内納入宗教テキストの研究成果を、同像を中心とする展覧会において発表するセミナーが予定されており、その成果報告の準備が整い本課題と有機的に結び付け展開することが可能となった。</p> <p>また、本ワークショップのために科学研究費基盤研究(S)により「日本における仏像像内納入品の世界」(展覧会図録等からの抜粋)資料集を作成し、参加者に配布した。</p>				

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「灌頂の世界」 (英文) JSPS Core-to-Core Program The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere
開催期間	平成 30 年 5 月 7 日 ～ 平成 30 年 5 月 9 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) アメリカ、カリフォルニア、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (英文) USA, University of California, Santa Barbara
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Fabio Rambelli, University of California, Santa Barbara, Professor 2-8

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (アメリカ)		備考
		A.	B.	
日本	A.	7/ 43		
	B.	1		
アメリカ	A.	2/ 6		
	B.	8		
イギリス	A.			
	B.	1		
合計 〈人／人日〉	A.	9/ 49		
	B.	10		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2 / 14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	<p>本来は古代インドにおける王の即位儀礼であり、仏教のなかで密教の東アジアへの流伝と共にもたらされた灌頂儀礼は、伝授継承の通過儀礼として宗教組織継承の核心を成す儀礼であった。灌頂を共通の主題として、とくに日本の宗教社会文化の形成のなかで古代から中世にかけて灌頂がいかなる文化を形象したか、真言密教に限らず、世俗の諸道・芸能ひいては天皇の即位儀礼をめぐる即位灌頂の伝承に及ぶ諸分野の専門研究者が、米国・日本・チベット・モンゴル等の諸領域の宗教研究者と共同して研究成果を報告、討議することにより、灌頂という宗教文化の結節点やそれが生み出す文化的主題について包括的に論議する。</p>		
セミナーの成果	<p>日本側7名と米国側8名によりアジア及び日本の灌頂を巡る多面かつ総合的な視点での研究の最先端の成果を共有提示することを目的とし、特に日本からはインド仏教における灌頂儀礼の研究から、中世日本の音楽や和歌の秘密伝授儀礼の研究まで、多岐に亘る灌頂の文化を検討することができた。宗教学から文学・芸能史・文化史・建築史学に至る人文学の総合性を生かし、分野横断的に通過儀礼としての灌頂が生み出す、国家の王権から諸道・芸能共同体(一家)までの生成・継承を司る紐帯としての宗教儀礼の普遍的な意義を再認識し得た。今後は、それぞれの報告を成稿し、翻訳および査読を経て、共同の編集・出版へと結実させる。また、本学会のために資料集「日本における灌頂の文化史 即位灌頂資料集」を科学研究費基盤研究(S)により編集し参加者に提供した。</p>		
セミナーの運営組織	<p>日本側の代表者(名大 CHT・阿部)が、米国側の代表者(UCSB・ランベッリ氏)と前年度からの十分な協議の上、日本側参加者を組織し、本拠点形成により UCSB に代表者以下の研究協力者を派遣する。SB 側はランベッリ教授を責任者とし、同大研究者・院生を中心に、米国・英国の宗教研究者を独自に招聘した研究集会を開催し、拠点形成事業による日本側の研究組織団を受け入れる。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費、外国旅費に係る消費税	金額 2,644,736円
	アメリカ側	内容：招聘費、研究集会開催経費、エクスカーション費	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 龍谷大学世界仏教文化センター「論義学会」「日本仏教と論義」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University: Rongi Conference The Rongi (monastic disputations) in Japanese Buddhism
開催期間	平成 30 年 5 月 12 日 ~ 平成 30 年 5 月 13 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、京都、龍谷大学
	(英文) Japan , Kyoto ,Ryukoku University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授
	(英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

参加者数

派遣元	派遣先	セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	11/ 24		
	B.	130		
フランス	A.	1/ 6		
	B.			
合計 <人/人日>	A.	12/ 30		
	B.	130		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (= 2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	平成 29 年度 10 月にフランスのコレージュ・ド・フランスにおいて開催された「日本仏教における論義の文化」第一回の研究集会（平成 29 年には、名大で準備研究会議が行われた）を受けて、更に日本仏教諸宗の論議の伝統や諸宗の学問教理形成史上の意義について、各分野の第一線の専門研究者による研究集会（初日は、『法宝義林』論義篇編集のための研究会議と若手研究者による研究報告と談論会、二日目は J.N.ロベール教授による基調講演と講演会・シンポジウム）を開催する。		
セミナーの成果	5 月 12, 13 の二日間にわたり、仏側拠点コレージュ・ド・フランスのロベール教授の来日を得て 12 日午前中に「法宝義林」論義篇の編集会議をロベール教授主宰でパリ学会の参加者中心に行い、午後は若手研究者 4 名による論議に関連する集中研究発表・シンポジウムを行った。13 日はロベール教授による仏教の論議とその言説空間の意義に関する基調講演の後、三名の日本側報告者による唯識・戒律・真言における論議の伝統とその思想的意義を巡る発表を経て、日本側コーディネーター阿部による総合的なコメントの後フロアを交えた討議を行った。全体で 150 名を超す参加者を経て、日本仏教の基盤が確かに論議に根ざし、そこから派生展開することを共通して認識した。また今後、論議文献研究の重要性とその建築・絵画遺産儀礼空間の作法を含む意義について継続的な研究の必要性が学会に共有された。また、本シンポジウムの為に科学研究費基盤研究(S)により「日本仏教と論義」資料集、また年度末には拠点形成によりパリ学会の追加資料集として資料集補遺を編集、参加者に提供した。		
セミナーの運営組織	龍谷大学世界仏教研究センター（DARC）が主催する「日本仏教における論義」学会に名大 CHT が拠点研究形成事業として共催する形態をとる。全体の運営・会場・懇親会等は全て龍谷大側が担当し、ロベール教授も招聘する。 名大 CHT は、本共同研究の国内研究協力者を本セミナーに出席・参加させ、またロベール教授が代表者となる初日の「法宝義林」編集会議を主導する。		
開催経費 分担内容 と金額	日本(名大)側	内容：国内旅費	金額 1,088,132 円
	龍谷大側	内容：研究集会開催経費	

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 像内納入品の国際ワークショップ (英文) JSPS Core-to-Core Program International Workshop on the Object Inserted within Religious Statues
開催期間	平成 30 年 6 月 23 日 ~ 平成 30 年 6 月 24 日 (2 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、横浜、神奈川県立金沢文庫 (英文) Japan, Yokohama, Kanagawa Prefectural Kanazawa bunko museum
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

参加者数

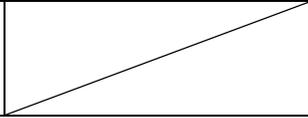
派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	3/6		
	B.	4		
アメリカ	A.	4/15		
	B.			
フランス	A.	1/2		
	B.	12		
合計 〈人/人日〉	A.	8/23		
	B.	16		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (= 2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>米国拠点校のひとつであるハーバード大学東アジア学部の J.ロブソン教授の提案を受け、同大の阿部教授と代表者との名大／ハーバード大の大学院生研究交流会に合わせて、仏教・神像など宗教的尊像の像内（胎内）に納入される各種の宗教文化の遺産（舍利・五蔵・経典・記録など）についての調査・研究の現状とその研究成果を報告し、情報を共有することにより、宗教文化遺産をめぐる研究の展開と深化を目指す。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>神奈川県立金沢文庫の全面的な協力を得て、ハーバード大学のジェームス・ロブソン教授と共同する国際ワークショップとして開催された。ハーバード大学の阿部龍一教授と大学院生、共同研究者である仏拠点のアロー教授および韓国の3名の若手研究者と、同じく米拠点協賛機関であるカナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学の C. ラフィン教授および同大学の大型研究学術事業 Frog Bear による欧米の大学院生などが参加し、日本側の研究者、院生も含め30名を超える広汎な仏像納入品の宗教文化遺産に関する集中セミナーとなった（金沢文庫所蔵、寄託の像内納入品の観覧・実地調査と称名寺金堂・本尊の拝観も行われ、ワークショップとしても有効であった）。セミナーは、ロブソン教授による基調講演に始まり、韓国の仏像「腹蔵品」を巡る歴史・伝承形成を含む研究発表、日本の仏像納入品の歴史と展開を仏像美術研究・仏像研究の中核研究者による報告がなされた。最後に全体で討議を行い、東アジア宗教圏全体として像内納入品の総合研究がなされた。この成果を含め、次年度に行われるハーバード美術館の聖徳太子二歳像を中心とする研究展示に、CHT 及び日本側研究者が全面的に協力し、像内納入宗教テキストの解説と研究成果の報告を通じて、今後のより広汎な像内納入の宗教文化遺産化貢献することを確認した。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>米国側のハーバード大学・J.ロブソン教授が組織した米国・韓国の拠点校の研究者が、名大 CHT の阿部、近本を代表として組織する東北大・金沢文庫・東大・文化庁の研究者と、名大および金沢文庫において共同の国際ワークショップ（像内納入品の調査、見学を含む）を三日間にわたり開催する。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：国内旅費</p>	<p>金額 47,650 円</p>
	<p>アメリカ側</p>	<p>内容：外国旅費等</p>	

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 ハンブルク大学国際宗教写本学ワークショップ (英文) JSPS Core-to-Core Program Hamburg university; International Workshop in the Study of Religious Manuscripts
開催期間	平成 30 年 8 月 21 日 ~ 平成 30 年 8 月 24 日 (4 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) ドイツ、ハンブルグ大学 (英文) Germany, Hamburg, University of Hamburg
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 近本謙介・名古屋大学人文学研究科・准教授 (英文) CHIKAMOTO Kensuke, Nagoya University, Graduate School of humanities, Associate Professor 1-5
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Jorge Kvendza, University of Hamburg, Professor 4-4

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (ドイツ)	備考
日本	A.	5/31	
	B.		
ドイツ	A.	2/8	
	B.	6	
その他	A.		カナダ
	B.	1	
合計 <人/人日>	A.	7/39	
	B.	7	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (= 2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	ドイツにおける人文学学術研究拠点センターオブエクセレンス (COE) (クラスター) のひとつ、ハンブルク大学の国際写本学のマニュスクリプト研究の一翼を担う Y.クベンツァー教授と、名大 CHT の宗教テキスト (宗教文化遺産学の中核研究概念) 学を有機的に連携及び相互の研究を発展させ、テキスト学による宗教文化遺産の世界のかつ普遍的な研究拠点化をはかる。		
セミナーの成果	独の協力機関ハンブルク大学の人文国際拠点である国際写本研究センターにおいて、日本宗教学を専門とする 2 名の教授及び院生と、CHT のアーカイヴス部門が研究推進し蓄積している日本の宗教写本対象に特に「聖教」と呼ばれる宗教テキストを巡り、和歌、音楽など諸分野の研究者 6 名による宗教写本の形成・伝承とその機能について、独側の研究者 6 名と共に報告・討議を行った。日本側コーディネーターが日本における「聖教」写本形成と伝承、再生産について基調講演を行い、また 10 名の報告により多面にわたる宗教写本の世界が展望され、今後の共同研究の課題設定の為に有益であった。最終日にはエクスカージョンとして、北部ドイツにおいて古典的な写本を伝来する都市図書館の見学、及び中世の巨大な修道院遺産である図書館と宝物館 (前年度のウィーンにおける修道院アーカイヴスの比較研究とも連動する) を見学した。		
セミナーの運営組織	日本側は名大 CHT の協力教員近本准教授が組織する。本拠点形成事業代表をはじめ、仏教・神道・歴史などの各分野の宗教テキスト研究者による研究グループを結成し、ハンブルク大学へ派遣を行い、同大のクベンツァー教授の所属する国際写本研究センターにおいて、代表による基調講演をはじめ 2 日間の研究会と 2 日間の調査、見学のエクスカージョンを行う。		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費、外国旅費に係る消費税	金額 1,237,871 円
	ドイツ側	内容：研究集会開催経費、招聘費用、エクスカージョン費、会議費	

整理番号	S-5
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 フランス・ストラスブール大学「近代 19～20 世紀の仏と日本ナショナリズムと同一性」研究集会 (英文) JSPS Core-to-Core Program France: Strasbourg University Similitudes between French and Japanese Nationalism in the 19 th and 20 th centuries
開催期間	平成 30 年 9 月 14 日 ～ 平成 30 年 9 月 16 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、ストラスブール、ストラスブール大学 (英文) France, Strasbourg, Strasbourg University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Marc Carel Schurr, Strasbourg University, Professor 3-7

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	2 / 11		
	B.	1		
フランス	A.	1 / 2		
	B.	7		
合計 <人 / 人日>	A.	3 / 13		
	B.	8		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人 / 人日は、2 / 14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	フランスにおける拠点形成の一環として、名大と学术交流大学・大学院教育に関する協定締結関係にあるストラスブール大と、名大との文化遺産研究に関わる西欧中世美術研究者のハイデルベルク大との共同研究に加え、より多元複合的な国際共同研究として進展させるために、ストラスブール側から提案された。		
セミナーの成果	<p>仏の協力機関ストラスブール大学の西歐美術史・大聖堂研究者、M・シェーレ教授主宰の許、本研究集会が開催され、かねてより共同研究を行っている CHT 視覚部門木俣教授が参加し、アルザス/ストラスブールという仏独両国の狭間にあり独自の歴史・文化を形成した地域が、フランス近代にいかなる自意識を形成したかについてを、議論を前提に報告した。ストラスブール大学の研究者 6 名に加え、日本側から 3 名の研究者が参加することにより、多元的にこの研究主題(近代における文化遺産の認識と形成が近代国家/国民意識の成立と不可分な関係にある)の重要性を喚起しかつ普遍化することができた。特に、名大コーディネーターの阿部による近世・近代の聖徳太子信仰から近代明治国家による文化遺産への転換・変容についての報告は、フランス側において注目され、この研究集会の課題にふさわしい報告として高く評価された。今後、この重要な課題を他の拠点機関との共同研究といかに有機的に結合させるか、その可能性が大いに期待される。</p>		
セミナーの運営組織	ストラスブール大学の M.シェーレ教授が組織する研究集会に、名大を中心とする日本側の研究者(木俣教授、阿部に加え、若手名の本主題にふさわしい美術史・文化史の研究者)が、本拠点形成事業により渡航、参加する形態をとる。日本側は名大 CHT が窓口となり、ストラスブール大と名大 CHT の共催の形成とする。		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費、外国旅費に係る消費税	金額 604,322 円
	フランス側	内容：研究集会開催費用、招聘費用、宿泊費	

整理番号	S-6
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 フランス・エクス・マルセイユ大学「中世日本の世界像(ヴィジョン・体系)ー文化遺産としての世界テキスト」 (英文) JSPS Core-to-Core Program France University Aix-Marseille “The Worldview of Medieval Japan “ (Vision; system); World Texts as Cultural Helitage
開催期間	平成 30 年 11 月 23 日 ~ 平成 30 年 11 月 25 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、プロバンス、エクス・マルセイユ大学 (英文) France ,Provence University d'Aix-Marseille
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Arnaud Brotons, Aix Marseille University, Professor 3-8

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フランス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	5/ 32		
	B.	1		
フランス	A.	1/ 3		
	B.	1		
合計 <人/人日>	A.	6/ 35		
	B.	2		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14 (=2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	<p>コレージュ・ド・フランスを中心とする共同研究をフランスとの学術拠点形成事業として多元・複合的に発展させるため、名大人文学研究科と学術交流協定を締結しているエクス・マルセイユ大学と日本および中世を対象とした宗教文学テキストを媒介とする世界像の形成過程を探り、その過程の所産としての特筆すべき文化遺産をめぐって、歴史・文学・宗教・美術学の諸分野の研究者が、各自の専門分野・領域の対象を通じて研究成果を披露し、その文化的意義について自由に討議を行う。</p>		
セミナーの成果	<p>協力機関であるエクス・マルセイユ大学のアルノー・ブロントス教授と阿部が共同し日本側から6名・仏側から2名の参加者により開催され、コーディネーターの阿部の基調講演により会議全体の輪郭を提示、概観し、特に童子神/護法という“小さな神々”に注目し、日本の神仏信仰の特質を論じた。この他に、中世日本の神仏信仰と秘教的な神仏の中間領域に存在する神々と儀礼・図像などを多面的に考察する報告を同時通訳付きで行った。この主題の許で改めて証明される日本宗教文化の豊かな展開、諸位相、宗教・宗派の制度を超えた民俗信仰の次元で共有される文化遺産のテキスト領域が小さな童子神のアイコンによって表されることになる点に、大きな意義が見いだされた。</p>		
セミナーの運営組織	<p>エクス・プロバンス大学側の受人教員であるアルノー・ブロントス教授を中心に、同大の日本研究者とエクス・プロバンス側が招聘するフランス国内の日本および西欧の中世研究者と日本側の代表者である阿部をはじめ人文学研究者を中心にゲストスピーカー1名を含む7名がエクス・プロバンス大学を訪問し、11月末の二日間の研究集会をエクス・プロバンスにおいて開催する。翌日はエクスカーションとして、プロバンスのシトー派修道院など、当地域の宗教文化遺産およびアーカイヴスを探訪・見学する。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費、外国旅費に係る消費税	金額 1,613,594円
	フランス側	内容：研究集会開催経費、会議費、エクスカーション費	

整理番号	S-7
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 第二回 南山大学宗教文化セミナー (英文) JSPS Core-to-Core Program Nanzan Seminar for the Study of Religion and Culture 2
開催期間	平成 31 年 1 月 13 日 ~ 平成 31 年 1 月 15 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、名古屋、南山大学 (英文) Japan, Nagoya, Nanzan University
日本側開催責任者氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

参加者数

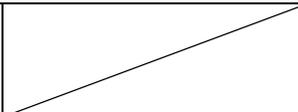
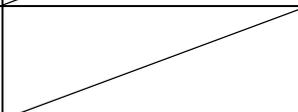
派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	5 / 12		
	B.	8		
その他	A.	0 / 0		募集若手研究者
	B.	5		
合計 <人/人日>	A.	5 / 12		
	B.	13		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2 / 14 (= 2人を7日間ずつ計14日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>平成 30 年 1 月に、本拠点形成事業により開催した第二回宗教文化セミナーに引き続き、南山大学宗教文化研究所において、名大 CHT と共催により、海外（欧米）大学において日本宗教を研究する大学院生（留学生）や若手研究者を公募により選出する。その研究成果を日本語で報告し、招へいされた日本宗教研究者をディスカッサントとして討議を行い、研究上の交流をはかり、博士論文作成および日本の学会界での発表等の進捗を助ける。また、日本宗教に関する資料や文化遺産の見学などエクスカージョンを行い、相互の親睦をはかる。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>前年度 1 月に行われたセミナーに引き続き、南山大学宗教文化研究所において、予め公募によって選出された 5 名（国籍はアメリカ・イギリス・イタリア・ドイツ・中国で、所属大学はハーバード大学、ハイデルベルク大学、ロンドン大学 SOAS 等であった）の博士後期課程大学院生（何れも博士論文執筆中）が報告者として招聘され（高度化推進経費が用いられた）参加し、これに CHT から 5 名のコメントーター及び南山大学宗教文化研究所から 4 名のディスカッサントが参加して、2 日間にわたるセミナーが開催され、各 90 分の日本語による報告と質疑が行われた。報告は、中世の神仏習合、戒律の儀礼実践、現代仏教の社会参画、新宗教の生成過程など日本の宗教文化全般に亘り、方法も多様であった、何れも新鮮な発見に満ちた意欲的なものであり、コメントーターとの質疑も活発に行われ、報告者の能力の高さも注目に価する。3 日目にはエクスカージョンとして長野県新野の雪祭り見学に赴き、民俗祭儀芸能を実地に就いて見聞し相互の交流を深めた。このセミナーの経験を通して、参加者が日本の宗教文化遺産の意義と価値を共有し、未来の国際的な宗教文化ネットワーク形成の礎となることが期待される</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>南山大学宗教文化研究所が企画運営を担当し、年度のテーマ（課題）の提案から公募・報告者選抜連絡とセミナーの運営までを行う。名大 CHT は報告者、ディスカッサントの謝金および共同開催（エクスカージョン等の企画運営を行う）としてその実施を支援する。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側 (名古屋大学)</p>	<p>内容：本事業経費より支出なし</p>	
	<p>南山大学</p>	<p>内容：セミナー開催経費、通信費</p>	

整理番号	S-8
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 コロンビア大学・名 大国際研究集会「境界・芸能・神仏」 (英文) JSPS Core-to-Core Program International Research Symposium, Columbia University: “Performing Arts: Establishing and Crossing Boundaries”
開催期間	平成 31 年 3 月 15 日 ～ 平成 31 年 3 月 17 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市 名、会場名)	(和文) アメリカ、ニューヨーク、コロンビア大学 (英文) USA, NY, Columbia University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場 合)	(英文) Haruo SHIRANE, Columbia University, Professor 2- 1

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (アメリカ)		備考
		A.	B.	
日本	A.	8 / 43		
	B.	1		
アメリカ	A.	4 / 8		
	B.	130		
合計 〈人／人日〉	A.	12 / 51		
	B.	131		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2 / 14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	<p>拠点形成事業におけるコロンビア大学との共同研究の中間成果を提示するためのシンポジウムとして、共同研究に参加する双方のメンバーおよびゲスト研究者を招へいする。共同研究の主要課題である日本文化における境界の文化論を、今回は「越境」という ^{ムーブメント} 動態運動において焦点化し、事前に報告を論文化したうえで、全参加者が報告内容を共有し報告を経て特に ^{パフォーマンス} 芸能 という ^{フィールド} 座標（領野）においてディスカッサントを交えて討議を行い、さらには後半の各共同研究相互とのクロスオーバーを期すための基盤を構築する。</p>		
セミナーの成果	<p>共同研究(R-1)の中間成果を日米双方から提示共有し、共通の場での議論を経て、国際学术界で評価される最先端の成果へと至る為開催した本研究集会は、日本から9名、米側から9名の報告者により、3つの基調・総括講演と6つの主題を異にするセッションで構成された2日間に亘る大規模な学会となり、延べ130名が参加、聴衆となり活発なコメントや討議が交わされた。この中には、若手研究者や大学院生によるセッションもあり、本研究集会の課題に触発されて博士論文の成果がより発展的に提出されることになった。全ての報告は翻訳用のショートバージョンとフルペーパーの予稿が提出されており、その査読によって充実した議論が可能となり、相互の研究上の理解に資することになった。更にこの討議を経て、編集段階に進み、査読と改稿を経て英文論集として公刊される基盤が既に築かれたといえよう。また、この予稿集は拠点形成より報告書として参加者に回覧され、今後の共同研究推進のモデルとして参照されることになる。</p>		
セミナーの運営組織	<p>コロンビア大学東アジア学部（文学、宗教）と名大 CHT（阿部、近本）が共同開催し、それぞれの行う共同研究の中間的成果を本セミナー（基調講演、シンポジウムを含む国際研究集会形式）において披露する。集会は会場のコロンビア大学側で運営し、日本側がこれに参加する形態をとる。また名大では平成30年度内にハルオ・シラネ、マイケル・コモ教授参加の許に小規模な研究会や研究打ち合せ、実地調査等を、それぞれの日常的研究活動として行った。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：外国旅費、外国旅費に係る消費税、翻訳者謝金、報告書作成費用	金額 3,922,744円
	米国側	内容：セミナー開催経費、アメリカ側招聘研究者費用、	

整理番号	S-9
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「仏教とキリスト教における正統と異端」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Heresy and Orthodoxy in Buddhism and Christianity”
開催期間	平成 30 年 8 月 27 日 ～ 平成 30 年 8 月 28 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) スイス、ヌーシャテル、ヌーシャテル大学 (英文) Switzerland, University of Neuchatel
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Jean-Daniel Morerod、University of Neuchatel、 Professor

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (スイス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	5/8		
	B.			
スイス	A.			
	B.	3		
フランス	A.			
	B.	3		
合計 〈人／人日〉	A.	5/8		
	B.	6		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2／14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	2017年10月にコレージュ・ド・フランスで行った日本仏教に関する論義・宗論（宗教的論争）の展開を通じた宗教文化遺産の形成やその価値判断を巡る宗教思想的議論に関し、その焦点となる「異端」（およびその対立概念として成り立つ「正統」の確立の）問題について、西欧キリスト教と日本宗教文化の比較を試みるために、ヌーシャテル側から提案された。		
セミナーの成果	名古屋大学 CHT とヌーシャテル大学で、日本および西欧中世の異端言説にまつわる学会を共同で企画し、日本からは6名が参加した。これは、2017年9月にパリのコレージュ・ド・フランス主催で開催された日本の宗教における「論義・宗論」に関する学会で提起された課題から要請されたものである。異なる意見を交わすことは、日本宗教史上、各宗派の宗教意識を強め、正統としての自負を有する種の学派と集団に付与すると同時に、そこから排除の対象となったものが異端として括られることにも繋がった。そこから、正統と異端という分別が、どのような方法論で従来の史学や宗教学で扱われてきたのかが重要な問題となった。この方法論を認識する上で、日本が近代以降、西欧の学問的枠組みを継承してきたことから、西欧史において相応する問題を扱う研究を参照することが必要となる。こうした問題意識が焦点化されたのが、ヌーシャテルでの学会であった。		
セミナーの運営組織	スイス・ヌーシャテル大学のジャン=ダニエル・モレロ教授を中心に、スイス側は、フランスから招聘した研究者および通訳者も含め、8名。 日本側は代表者の阿部をはじめ名大から3名、他研究機関から2名がヌーシャテル大学を訪問しセミナーを開催する。		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容：本事業経費より支出なし	
	スイス側	内容：研究集会開催費、招聘費用	

整理番号	S-10
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「異端とその宗教的言説—日本と西欧の実験的比較史学の試み」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Heresy and History of Religion : Comparing Japan and the West”
開催期間	平成 31 年 3 月 4 日 ~ 平成 31 年 3 月 5 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、名古屋、名古屋大学 (英文) Japan、Nagoya、Nagoya University
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 阿部泰郎・名古屋大学人文学研究科・教授 (英文) ABE Yasuro, Nagoya University, Graduate School of humanities, Professor 1-1

参加者数

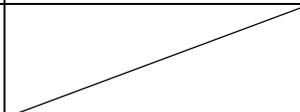
派遣先 派遣元		セミナー開催国 スイス		備考
		A.	B.	
日本	A.	13/ 26		
	B.	4		
スイス	A.			
	B.	4		
フランス	A.			
	B.	3		
その他	A.			ロシア
	B.	1		
合計 〈人／人日〉	A.	13/ 26		
	B.	12		

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※人／人日は、2／14 (= 2 人を 7 日間ずつ計 14 日間派遣する) のように記載してください。

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>文学や宗教における比較の手法は、確立されて久しく、比較文学や比較宗教学が一つの専門分野と位置づけられて久しい。しかし、歴史は、その比較がつとに試みられてこなかった分野といえる。その背景には、歴史が、現在の国家の在り方や国民のアイデンティティと深く結びついているがために、比較を安易に行うことが憚られており、また方法論も確立されていないということがある。本学会は、2018年8月スイス・ヌーシャテルで行われた研究集会の延長線上に位置づけられ、一貫して「異端」という主題のもとに、国家・言語圏・分野の境界を乗り越えて、様々な国籍・バックグラウンドの人文研究者が一同に介し、ある程度の普遍性をもつテーゼを導きたいという目的のもとに議論を交わす。その点で、拠点形成事業の積極的継続と安定を示す機会でもある。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>8月のヌーシャテル大学でのセミナー(S-9)を受けて、ヌーシャルテル大学の代表ジャン＝ダニエル・モレロ教授率いる研究チームが、フランス、ロシアからの研究者を引き連れ、名古屋大学を訪問しセミナーが開催された。これは、名古屋大学が2018年8月にヌーシャルテル大学を訪問しセミナーを開催した成果を受けて、ヌーシャルテル大学が日本の科学研究費補助金に相当するスイスの国立学術基金から研究費取得に成功したことで実現した。このセミナーではヌーシャルテル大学における学会から発展して、さらに時代の幅を、中世に留まらず古代と近世も見据えた形で、なおかつ非常勤講師や研究員、特任准教授の若手研究者が、中堅、ベテランの研究者と並んで発表する画期的なものとなった。日本中世史のみならず、日本国内で活躍する近世・中世の西欧史研究者の聴講者も多く、多分野横断型の研究拠点としてのCHTの役割を周知する機会ともなった。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>スイス・ヌーシャテル大学のジャン＝ダニエル・モレロ教授を中心に、スイス側は、フランス、ロシアから招聘した研究者も含め、7名。このうち、ロシアからの研究者以外は、8月の研究集会参加者である。日本側は代表者の阿部をはじめ名大から3名、他研究機関から6名、そのうち2名は前回集会の参加者である。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容：会議費、国内旅費、資料集作成費</p>	<p>金額 1,051,554円</p>
	<p>スイス側</p>	<p>内容：スイス側参加者の旅行費</p>	

7-3 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

8. 平成30年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	韓国(第三国)	合計
日本	1	7 / 43 (/)	2 / 11 (/)	5 / 31 (/)	/ (/)	7 / 43 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	7 / 42 (0 / 0)
	3	/ (/)	5 / 32 (/)	/ (/)	2 / 12 (/)	7 / 44 (0 / 0)
	4	8 / 43 (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	8 / 43 (0 / 0)
	計	15 / 86 (0 / 0)	7 / 43 (0 / 0)	5 / 31 (0 / 0)	2 / 12 (0 / 0)	29 / 172 (0 / 0)
アメリカ	1	/ (4 / 15)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (4 / 15)
	2	/ (1 / 1)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (1 / 1)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (5 / 16)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (5 / 16)
フランス	1	/ (2 / 8)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (2 / 8)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (2 / 8)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (2 / 8)
ドイツ	1	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (2 / 8)	/ (/)	0 / 0 (2 / 8)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (3 / 18)	0 / 0 (3 / 18)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (2 / 8)	0 / 0 (3 / 18)	0 / 0 (5 / 26)
合計	1	0 / 0 (6 / 23)	7 / 43 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	7 / 43 (6 / 23)
	2	0 / 0 (1 / 1)	0 / 0 (0 / 0)	2 / 11 (2 / 8)	5 / 31 (0 / 0)	7 / 42 (3 / 9)
	3	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	5 / 32 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	7 / 44 (3 / 18)
	4	0 / 0 (0 / 0)	8 / 43 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	8 / 43 (0 / 0)
	計	0 / 0 (7 / 24)	15 / 86 (0 / 0)	7 / 43 (2 / 8)	5 / 31 (0 / 0)	29 / 172 (12 / 50)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

※相手国以外の国へ派遣する場合、国名に続けて(第三国)と記入してください。

8-2 国内での交流実績

第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	合計
11 / 24 (/)	0 / 0 (/)	2 / 2 (/)	5 / 11 (/)	18 / 37 (0 / 0)

9. 平成30年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	900,470	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	7,976,501	
	謝金	746,538	
	備品・消耗品 購入費	0	
	その他の経費	2,516,529	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	609,962	
	計	12,750,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,275,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		14,025,000	